

白金蔭

一月号



平成25年1月発行 第23号

白金蔭月例句会案内

二月十五日(金) 12:00 ~ 15:00 (アビスタ第一和室)

兼題:寒明け、鱧(さより)

三月十五日(金) 12:00 ~ 15:00 (アビスタ第3学習室)

兼題:受験、春の水

四月十九日(金) 12:00 ~ 15:00 (アビスタ第一和室)

兼題:枝垂桜、蜂

寒明け、鱧(さより)の参考句 (二月十五日分)

寒の明け死にたくもなく顔を剃る

寒明けの日矢の眩しき門を出づ

寒明けの鶏ニこと鳩くくと

寒明けの雪どつと来し山家かな

寒明けや野山の色の自ラ

病妻に兎も角寒の明けにけり

紅すこしはしりし口の鱧かな

ちりやすくあつまりやすくサヨリらは

美貌なる鱧の吻は怖るべし

口尖り鱧にも似し女かな

待つ夫に買ひし鱧の眼の澄みて

海の色透かし透かしてさより来ぬ

富川直芳

宇川清英

石井 香

高浜虚子

青木月斗

橋本花風

大谷三笑

篠原 梵

安住 敦

海老原真琴

大野ツヤ

佐分靖子

月例句会報 (13 / 1 / 18 十名 欠句の名兼題 新年一般)

飯田孝三

笠智衆の肩の後ろを初詣

さいころの目玉達磨の白い眼

初キネマおなじ女 先生子と泣ける

往還を昭和の児童四方拜

スカイツリーを股挟み出初かな

神宮の底地下鉄メトロにて初詣

大雪や瞭かなるは鴨の嘴

蛇は寝て巳の賀状のみ忙しけれ

紅椿妖し大島渚の死

瑠璃褪せぬやう閉じてある冬の蝶

富士よりも高く見えたる初筑波

増田陽一

増田悦子

菱喰の啼く江戸崎を思ひをり

雪かきの音のきこゆる朝寝かな

初雪の子らの声よく響くなり

去年今年テレビの画面休みなし

紅白歌合戦SMAPとりを取る年に

初鏡尉の面に似て来る

読初は源氏の初音と決まりたる

初泳女性をやつぱり好きと云ふ

女正月源泉の泡背子のぼる

秩父から自然薯包み礼者くる

礼者の子障子破りて帰りけり

沖縄は日焼け止めすと賀状かな

名前ある犬と猫にもお年玉

初電車翁の面を見て帰る

杉浦弥栄子

光成高志

足早に北風突いて寒稽古

書き初めは福という文字笑いけり

元旦や猫に起こされ狸寝す

初雪に残る足跡数えたり

初仕事PCに向いフリーズす

田宮敦子

ストーブの前は三毛猫陣取れる

科学館目鼻は葉っぱ雪ダルマ

雪化粧遊女の墓の朝かな

水漬やお茶とお菓子を注文す

スカイツリー枯木一本に隠されて

小山陽也

初詣伊勢より始め伏見まで

元旦や老いた宮司は社務所にて

楠はもつこりと雪かぶるかな

雪の朝木々それぞれの積もり方

大晦日形代に書く八十才

初詣繕りも程度で神宿す

初日の出不可抗力があるらしい

ひしこいを見に行く蓮田に人浮いて

祈るだけ祈ってみるよ初日の出

初日の出妻は寝かしておいてやる

初乗りの一番電車一輛目

産土の松の間より初日の出

綿飴をねだる子の手の破魔矢かな

松の内賭け麻雀を許されて

黒豆のことことことと去年今年

福詣赤提灯で果てにけり

長篇に栞して待つ除夜の鐘

姉訪へば筑波風に頬被

青木啓泰

木曾谷へ一つ落ちゆく冬の星

雪多くぼ焔にあまねき我孫子かな

選句結果(数字は入選数)

5 木曾谷へ一つ落ちゆく冬の星

4 姉訪へば筑波風に頬被

4 長篇に栞して待つ除夜の鐘

4 沖繩は日焼け止めすと賀状かな

4 産土の松の間より初日の出

3 雪多くぼ焔にあまねき我孫子かな

3 ストープの前は三毛猫陣取り

3 ストープの前は三毛猫陣取れる

3 礼者の子障子破りて帰りけり

2 女正月源泉の泡背ナのぼる

2 初乗りの一番電車一輛目

2 秩父から自然薯包み礼者くる

2 科学館目鼻は葉っぱ雪ダルマ

2 大雪や瞭かなるは鴨の嘴 くち 陽

1 大雪や瞭かなるは鴨の嘴

吉羽多美子

多美子

幸一

敦子

みち

高志

多美子

みち

敦子

松村幸一

- | | | | | | |
|---|-----------------|-----|---|------------------|-----|
| 2 | 初雪の子らの声よく響くなり | 悦子 | 1 | 読初は源氏の初音と決まりたる | 高志 |
| 2 | 初キネマ女先生子と泣ける | 孝三 | 1 | 初雪に足跡残し数えたり | 弥栄子 |
| 2 | 初日の出妻は寝かしておいてやる | 啓泰 | 1 | 初雪に残る足跡数えたり | |
| 2 | 初鏡尉の面に似て来る | 高志 | 1 | さいころの目玉達磨の白眼 | 孝三 |
| 2 | 黒豆のことごとくことと去年今年 | 多美子 | 1 | 初仕事PCに向いフリーズす | 弥栄子 |
| 2 | 紅椿妖し大島渚の死 | 陽一 | 1 | 元旦や老いた宮司は社務所にて | 陽也 |
| 2 | 雪の朝木それぞれの積もり方 | 陽也 | 1 | ひしこいを見に行く蓮田に人浮いて | 啓泰 |
| 2 | 雪の朝木々それぞれの積もり方 | | 1 | 去年今年テレビの画面休みなし | 悦子 |
| 2 | 瑠璃褪せぬやう閉じてゐる冬の蝶 | 陽一 | 1 | 神宮の底地下鉄にて初詣 | 陽一 |
| 2 | 祈るだけ祈ってみるよ初日の出 | 啓泰 | 1 | 初詣伊勢より始め伏見まで | 陽也 |
| 1 | スカイツリーを股挟み出初かな | 孝三 | 1 | 紅白歌合戦SMAと取りを取る年に | 高志 |
| 1 | 笠智衆の肩の後ろを初詣 | 〃 | 1 | 大晦日形代に書く八十才 | 陽也 |
| 1 | 初電車翁の面を見て帰る | みち | 1 | 元旦や猫に起こされ狸寝す | 弥栄子 |
| 1 | 往還を昭和の児童四方拜 | 孝三 | 1 | 綿飴をねだる子の手の破魔矢かな | 多美子 |
| 1 | 初泳女性をやつぱり好きと云ふ | 高志 | 1 | 初詣繕りも程度で神宿す | 啓泰 |
| 1 | 初日の出不可抗力があるらしい | 啓泰 | 1 | 水洩やお茶とお菓子を注文す | 敦子 |
| 1 | 名前ある犬と猫にもお年玉 | みち | 1 | 松の内賭け麻雀を許されて | 多美子 |
| 1 | 雪化粧遊女の墓の朝かな | 敦子 | 1 | 書き初めは福という文字笑いけり | 弥栄子 |
| 1 | 楠はもつこりとして雪かぶる | 陽也 | 1 | 菱喰の啼く江戸崎を思ひをり | 悦子 |
| 1 | 楠はもつこりと雪かぶるかな | | 1 | 足早に北風突いて寒稽古 | 弥栄子 |
| 1 | 雪かきの音のきこゆる朝寝かな | 悦子 | 1 | 福詣赤提灯で果てにけり | 幸一 |
| 1 | 蛇は寝て巳の賀状のみ忙しけれ | 陽一 | 1 | スカイツリー枯木一本に隠されて | 敦子 |

富士よりも高く見えたる初筑波

悦子

一句鑑賞

光成高志

初キネマ女先生子と泣ける

孝三

句会の二日前、国谷さんのクローズアップ現代で取り上げられた木下恵介監督の映画「二十四の瞳」の一場面を念頭に、おなご先生子と泣けるに初キネマを付けた。NHKは、この映画のように人の気持ちに寄り添い一緒に泣き一緒に笑う思いやりの心を忘れまい、今の世の中、と言いたかったのだ。主張などは一切していないが、新年に初めて見る映画に、昭和史の激動の中で教師と教え子の美しい師弟関係を郷土色豊かに描いた壺井栄原作の映画「二十四の瞳」を暗示させるルビといい、映画をシネマならぬキネマとしたところ、下五の切れも強く、とどめなく流した涙の記憶に響く秀句である。

黒豆のこくとこくと去年今年

多美子

幸一さんの文が届いたが、敢えて足早に書く。十七音の中母音の○音が13ある。13／17である。黒豆を煮るのはもつと早いうちだろうとか野暮なことは言わない。去年を振り返り、新年を寿ぎ、今年はいいい年になります

ようにという思いが、黒豆の煮えることとした擬態音に籠っている。これも、去年今年貫く棒のごときもの(虚子)の一つである。

紅椿妖しく大島渚の死

松村幸一

陽一

ある思い出がある。六十年安保の時代、ぼくは印刷工場の文選工員だった。その工場の現場に大島渚さんが来てくれて、ぼくら少数の映画討論会に加わった。熱心に耳傾け且語り、時間をはるかに越えても、一向に気にする様子がなかった。ぼくは「青春残酷物語」にも「日本の夜と霧」にもどうしても納得出来なくてほとんど疑問ばかりぶつけたが、渚さんは昂奮の表情をかくさぬまほとんど一対一で向き合つて、説き来り説き去つて飽くことを知らなかった。終つてからも、「どう、何処かで一杯やつて続きをしませんか」と誘ってくる始末。激しく燃える知的青春そのものの精気と誠実と繊細さに、身震いするような感動が、あとあとまで残った。「紅椿妖し」としか言いようのない作者には二度とかえらぬあの時代への箴めた思いがあろう。読み手であるこちらにも多少の感慨はあつて、果たしてつながらるかどうかは分からぬ。今は「妖し」だけであとは何を語らなくても、充分と納得しよう。余計な深読みは避けたいが、狂瀾怒涛の果ての

おだやかに広がる渚に一輪ころげた巨大な紅椿の妖美さは、渚さんの苛烈な思想劇とエロスの一生を象徴するかのごとく、読み手の胸の裡から消えることはないだろう。なお原句は、「紅椿妖し大島渚死す」だった。

沖繩は日焼け止めすと賀状来る

みち

原句のまままで頂けるが、座五は「年賀状」でいいかな、と思つた。そしたら孝三さんから「賀状かな」ではどうかという案が出、早速その方がいいと賛成した。即ち「来る」では、叙述の素気なさが気にかかる。「年賀状」では素気なさは消えるが、固さがのこる。「かな」であつて、中七のそう書いてよこした沖繩の人のこちらからの柔らかいこだまがこもる。差し出した人と受けとつた人の心が通う。

こんな細やかなところに思いを至すかどうかで、結構俳句は生きたり死んだりする。同じ作者の「秩父から自然薯包み礼者くる」。これもいい句。しかしこれも「礼者かな」がいい。「秩父から自然薯抱え礼者かな」。こんな礼者やこんな年賀状を出してくれる人をぼくも持ちたい。羨ましい。

黒豆のことことこと去年今年

多美子

リフレインがいい。類想はあるかもしれないが、去年今年の使い方が堂に入っているから、句の前で思わず立ち止まる。ゆつくりと流れてゆく大きな時間の境い目であ

り、色々なことがあつたとしてもこうして平穩無事に送り迎えることが出来る只今の命の有難さを思う。毎年こうでありたい。かくありたい。「産土の松の間より初日の出」も佳句。真つ暗だつた鎮守の森の一廓の松の合間から登場する初春の日差しが、いかにも眩しく大きく烈しい。

許されし賭け麻雀や松の内

多美子

ぼくは麻雀を全く知らないが、許してくれたのは細君であろう。松の内のことだから少しならと、大目に見てくれたのだ。但し原句は、「松の内賭け麻雀を許されて」だった。これだと松の内が単に特殊な時間としての役割しか与えられておらず、いささか物足りない。松の内を座五に置いたらいかである。すると夫婦の間のある狎れ合いを許し合う親密でほほえましい雰囲気が、浮かび上つて来ないだろうか。「麻雀や」のやにも、制限付きで寛大になつてくれた相手への、済まなさと恐縮が出て来ないだろうか。いやいや、ぼくがもし麻雀を知つていたら、以上はすべて埒もない空言になるかもしれない。(後記作者名を後からしりましたが、誤解したままの鑑賞はこれで通させてもらいましよう)

初乗りの一番電車一輛目

飯田孝三

多美子

新年、初めて乗る電車がその日、いの一の一番の始発電車。しかも一輛目。一番つくめである。淑気凛々、気力充滿めでたし。俳句は一人称の伝に則ればむろん本人。さて、新年に何を期するのだろうか。滑らかで弾む調へが快。さてさて今年は何の年、これに肖り同好相競い、脱皮よろしく心身澁刺の気をいまさる新たにしよう。

科学館目鼻は葉っぱ雪ダルマ

敦子

科学館は科学の粹を展示する殿堂。でんと偉容な建物が坐る光景が目につく。あるいは建築先端技術の成果を結集した斬新なそれが。前庭につくられた雪達磨の目鼻は木の葉。その取合せがかけ離れ、面白い。名は体を現す「カガクカン」の重々しさに対する「メハナハツ」のカルさはなんとしよう。とりわけ、十七音中十音を占めるA音が飄逸の気に輪をかける。雪「ダルマ」のカタ仮名書きもなかなかだ。雪ダルマくん、身の置きどころに窮している風だ。はて、わたしいやワガハイはどっち？

礼者の子障子破りて帰りけり

みち

お子さん連れの年賀客がお帰りの後である。あらあら、また障子を破つて、と言いながら目鼻が綻ぶ。核家族の時代とはいえ、お子さんご家族は一番の身内。いつも

は一緒にいないので、よけい愛しい。あえて「礼者と洒落る、その間どりの妙が即ち俳諧。「けり」は目をなくさんばかりの態。い五音ルフランの弾みがめでたい。

木曾谷へ一つ落ちゆく冬の星

幸一

木曾谷へ二星が走る。「ゆく」に、その光茫の軌跡を追う視線を感じる。凍空の星は冴えさえと光鋭く、木枯らし吹きすさぶ霜夜の星はまさに「荒星」の名にふさわしい。さては、源平の盛衰も光年の目で見れば、只々、光茫一閃、瞬きの間か。歴史的時空を負つて大きく、かつ、胸懐の頗る深い一句である。

大晦日形代に書く八十才

陽也

鎮守か檀那寺で歳末の御祓いを受けられたのだ。人形の御礼に名前と年齢を記す、「八十才」。戦中、銃後で育つた元軍国少年、戦後は祖国復興に挺身した産業戦士であつた世代である。今や、傘寿。さて胸中を去来するのは何だろう。八十「歳」ならぬ、く「才」の抱懐やいかに。曰く諧謔。

書き初めは福という文字笑いけり

弥栄子

書初めは「福」の文字である。く「文字」で切れる。緊張で手元がちよつと狂い、「福」の字が笑つちやつたんじやない言々におめでとつ、おめでとつ、さらに、書初めまで「福」というのが可笑しいのである。まあいいや、「福笑い」

の遊びもあり、もうすぐ「福はあー内」だから。むろん、「福」の字がちよと笑い気なものも、また、結構々々。新かな遣いだが、旧の方が俳諧味が出るだろう。書いて見る。書初めは福といふ文字笑ひけり

蛇は寝て巳の賀状のみ忙しけれ

陽一

今年は巳年、「巳」は蛇がとぐろを巻く形からきたというが、賀状に切手にと、とぐろを巻く暇もない忙しさだ、現の蛇は同胞毬の如くに絡み合い、今し、熟睡のさ中だというのに。地球が狭くなつたとはいえ、世界を股にかけて東奔西走の大わらわ。なに？股はない。ふーむ、いやいや、記紀の昔から、蛇が眩いばかりの光に包まれて、河を渡り、海を越えたと伝えるそうな。(全ッセイ参照)

初日の出不可抗力があるらしい

啓泰

「想定外」ばやりの昨今である。光年刻みの宇宙・地球現象を猿に毛が三本多いだけの人間の知恵で推し量れる筈がない。どこかの国の、いや日本国かな、偉い先生がそう仰つていたな。となりや「どうしようもない」つてことかな。いや違う？「想定外」に代わる抗弁？フーム・：、「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して」、「恒久の平和」と安全を念願する、善良なる日本国民は、今年も年頭に当たり、あれこれ思いあぐねるのである。とまれ地球は廻り、日は昇る。そういえば、『日はまた昇る』とい

う、海外の名著があつたなあ。(ミシングウェイ著 1926 刊行)

高志

「初泳は新年皮切りの水泳ぎ。年々、健康志向が高まり、どこのスイミングプールも賑う。はてな、男女混泳が多いのかな。まさか神泉に禊する巫女を夢見ているのではあるまい。」「といふの伝聞態も曲者だ。外国語に無人称の話法があるが、むろん「われ」を含む。照れ隠しなのである。「初泳やっぱり女性が好きといふ」もあるかな。因みに「女性」は、「をんな」「おみな」「をなご」によしよ」とは違う、憧憬、賞揚の念を込めた、現代の美称、尊称の謂なのである。

富士よりも高く見えたる初筑波

悦子

初筑波は、初富士と共にどの歳時記にもなる。他に初比叡、初浅間。いづれも人々の信仰を集める天下の霊山・名山である。歌枕でも名高い。とりわけ筑波は、記紀・万葉の昔から歌垣の舞台として知られ、民が賑わい、国家繁栄の瑞祥の顛つところ。目交いの筑波の先に富士を一望するのである。遠景の富士が低く見えるのは自然の理だが、句の心を訪ねればその奥深さを知る。俳句はさりげなく、その先に何かがあるのがよい。(田句「覽揚載順」)

貴句断想Ⅲ (21号分)

住吉の反橋の反り初時雨

武者昭七

高志

「住吉」は摂津の国一の宮の住吉大社であろう。古来航海安全の神、和歌の神として信仰をあつめ、その建築様式は住吉造りとして知られている。作者の目は折からの初時雨にぬれて鮮やかに朱いそり橋に注がれている。「反橋の「反り」と「そり」を二度重ねたことから鮮やかに朱くかつ優美なそり橋の曲線と、その曲線の一点に注がれる作者の凝視の目が感じとれる。「初時雨」と「反橋」の取り合わせも、句の背景に優しいこの国の風土と文芸を想起させて奥行きを深くしている。

川端康成の短編に「反橋」があることを思い出した。(「時雨」「住吉」と連作)住吉大社のそり橋の頂上で主人公は自分が「母」の本当の子ではないことを知り激しい衝撃を受ける。汚辱にまみれた人生がそこから始まるというような小説であった。句の作者はそり橋に何を見たらうか。

盛あがりそしてなだるる萩の花

同

若いころ六年ほど鎌倉の町なかに住んだことがある。萩の寺で知られた宝戒寺が近かった。当時はさほどと思

わなかったが、近年行ってみると、まさに庭をうずめ尽くすほどの萩の大群落であった。夏にはつぼみをつけ威勢よくつんつん伸びていた枝が花をつけ、花が開き、やがて花の重みで枝はなだれるように地面に向かっていく。それは打ち寄せ、そして、なだれる由比ヶ浜の波の姿にも似ていると思う。「そして」が移りゆく季節とともに姿を変える萩の動きをとらえて見事と感動しました。

初時雨湖北古江の茫々

羊三

湖北は琵琶湖の北一帯の称。余呉湖のあたりも含んでの言い方だろう。実際の風光はどうであれ僕らの多くが描く湖北のイメージは寂しく暗い。それはおそらく「ホク」という言葉の帯びるやさしくひっそりとした響きとこの地の歴史に染みついた数々の悲劇の残影のせいだろう。「茫々」の一語から初時雨に煙る湖北のうみの蕭条とした広がりが出てくる。(頁 24, 12, 23)

ハガキ句管見 (第二十三報)

飯田孝三

断食のガンジーのこと寒卵

敏子

巨きく、深く、重い句である。寒卵がガンジーが断食する姿に見えるという。ガンジーは、インド建国の父、マト・M・K・ガンジー。戦中に少年期を送ったぼくらの目には、瘦身に白い晒布を肩からまとった、ガンジーの断食

する姿が焼き付いている。当時の新聞や写真ニュースがそれを伝えていた。寡黙。断定の力強さが、この句のいのちだ。それは、生涯、非暴力、抵抗運動の指導・実践に挺身した不撓の精神に通う。寒卵一つが地球よりも重い。そ

ハガキ句二十三報(07/2/14)

老犬の鼻黒光る年立てる

孝二

揚げ饅の店の混雑小正月

々

早春の女人高野に檜木の香

妙子

七福神巡りは途中失敬す

陽也

友の荷に一句書かれし落葉出づ

知恵

手賀沼新年句会

寒晴の鴉の腹は真白なり

白木

白鳥が浮く人類の突き当り

哲也

断食のガンジーのこと寒卵

敏子

文人の系譜の坂に蛇眠るか

陽一

待つことも夢のやうなる浮寝鳥

三穂

大寒や長元坊の俯瞰先

多佳子

春浅し寝るも多忙のうちであり

悦子

辞典繰ることも古りけり童の玉

不憫

沼の面に返す冬日の大三角

高志

んな気がしてくる。今年は、インドが独立して六十年、思えば、かれと手を携え、ときに、分つた、独立運動の元盟友の志士たちや、かれらを援けた、日本の朝野の人々について、わが国では、今や、語られることは少ない。

“Da N Ji Ki No Ga N Di I No Ko To Ka N Ta Ma Go”上
中の子音ルフランは、上中下各句、頭、脚の踏韻と相俟つて、句意を深甚にする。前半、I音が峻しい。中句半からのA、O音の反復は、力強く、厳かで、解放的だ。情韻交響の妙である。諸種歳時記の例句に見る諸家の寒卵の影が薄い。

文人の系譜の坂に蛇眠るか

陽一

我孫子、手賀沼周辺の吟行句。白樺派文人らの縁の地である。坂は天神坂だろう。勘所は、結「か」。その氣息に述べ懐の深さを知る。俳句の「断定」は尋常に関すること。そこを抜けるには、多年の研鑽と生得の感性が要る。

沼の面に返す冬日の大三角

高志

昼である。だから、大三角は星座ではなく、沼面に屈折、反射する日の光だろう。何の説明も要らない、印象鮮明、大きな句だ。「大」が、しつかと働き、撥ね返す冬日を宙に抱えあげる。読み返す度に、不思議に、冬日が大きく輝いてくる。沼の「面」は「も」と読みたい。

白鳥が浮く人類の突き当たり

哲也

人死して白鳥となる。日本武尊ならずとも、同類の説話は、世界の処々にあるようだ。わが古代びとは、人が、死後、鳥になるとか、鳥は、死者の魂の運び手だとか考えたらしい。もつとも、西洋では、鶴が人のいのちを運ぶ。それはそれとし、「浮く」がうまい。心象、白鳥の姿があざやかである。さらに、手腕は、「人類の突き当たり」だ。人類の「行き止まり」、「なれの果て」の観念ではない。具体の行動の結末を演出する。「人類」は、言うまでもなく、地球規模の概念である。

七福神巡りは途中失敬す

陽也

恒例の新年懇親、和氣藹々の宴おひらきの後は、ご機嫌、七福神めぐりと相なつた。仲間は、皆、気おけない町内の馴染み、七福のどのあたりで失敬しのだらう。え、覚えていない？ 軽妙洒脱ぶりがいい。「ほ」が利く。

寒晴の鴉の腹は真白なり

白木

印象鮮明。「寒晴」と鴉の「腹」の照応に隙がない。ために、「真白」が抜け、説明臭がない。「なり」が決まる。

早春の女人高野に檜木の香

妙子

早春の三室寺の境内に立つ思いだ。檜「木」が一木一木の幹を眼に見せる。芳しい。

大寒や長元坊の俯瞰先

多佳子

辞典繰ることも古りけり竜の玉

不憫

長元坊は、隼の類いだらう。前句はつき過ぎ、後は発見がない気がする。妄言多謝々々。

お便り広場(到着順、敬称略)

賀春

昨年は手賀沼の蓮見舟吟行を皮切りにいろいろとお世話になりました。嘗てない忘れ難い思い出をいただきました。歯に衣を着せぬ皆さんの論評も、深い理解が根底にあつてのことだから、どんなに叩かれてもシャワーを浴びたような爽やかさがある、句会の在りようとして、もつとも理想的といえるのではないでしょうか。

(H. 25. 1. 3 松村幸一)

「白金葎」着手有難うございました。一号一号ごとに充実してきて嬉しい限りです。やはり俳誌は書ける人が居ないとどうにもなりませんね。貴兄の鑑賞も文章も立派です。飯田さん武者さんも見事、応援します。

(H. 25. 1. 1 佐藤宏之助)

寒中ご夫妻ともどもご健吟のことと存じます。昭七兄から「貴句断想Ⅲ」の稿が届きましたので、転送いたします。貴宅へ直送するのは失礼かと思ひ、当方宛にした

と付記されていたので、「いや却つて喜ぶ」と伝えておきました。昔の詩や短歌「古典断想」風のものなどは非寄稿されたいとも付言しました。貴兄からも更に勧めたらと思ひます。哲也さんの遺句集『水馬』を読んでの駄文を同封します。十八日を楽しみにしています。ご自愛を。草々

(H. 25. 1. 10 飯田孝三)

賀春 本年もよろしくお願い致します。親友でたよりにしていた河野香苑が十二月中旬に亡くなりました。彼の句文集生前に出ましたのでお送り致します。十月二十八日・香苑の地元行方市の玉造中央公民館で、一時間ばかり俳句の講演をさせて貰いました。その日に「隣はせせらぎ」解説文十五枚校正完了手渡し、すぐに出版されました。それから一ヶ月も経ずに逝去。彼の担当していた副業指導「茨城川柳」(茨城新聞)選者、二十年も担当しておりましたが、彼の遺言で、小生がどうしてもこの一月より担当するはめになりました。新聞社が逃がしてくれないのです。私は本当に担当したくありませんでした。再三お断りするも、それ以上の謝辞は故人・奥さん・新聞社の重鎮(報道本部副部長の尊厳を傷つけること)になります。毎週土曜の紙面です。今日1/12の紙面で予告がありました。改めて選者の紹介になるそうです。俳句は叙情に根ざした自己表現なら川柳は同じ短詩型

なるも社会人生諷刺の自己表出と捉え選に当りたいと思ひます。(ギヤラは安い。)泣き笑いの弁えを忘れずです。よろしく叱責・指導願ひます。一週二十七句佳作短評付き。(H. 25. 1. 11 青木啓泰)

明けましておめでとございませう。本年もよろしくお願い申し上げます。会費同封致します。三時のお口よこしは名前が良いので送ります。一人一粒づゝあればよいのですが。勉強会も出席だけ、樹木巡りもただ歩くだけ三時のおやつ担当になつています。力学の本も易しい本と難解の本と首尾一貫しない姿勢です。毎朝ゴミと落葉焚きが日課です。皆様の益々の活躍を。白金霞を楽しみにしています。(1. 15 小山陽也)

前略 過日は「白金霞」第二十二号「患与にあずかり大変恐縮いたしました。厚く御礼申し上げます。表紙のグラビヤもカラーに替つたようにお見受けし、穂先のきらめきが一段と輝いた感じが致しました。空の碧さも気持ちよし。貴誌の一段の発展をお祈り致します。

孝三兄からも寄稿のすすめを何度か頂戴していますが、拙い手すさびの事とて面はゆく何となくためらいを感じているというのが本当のところですか。(きれいな文章を、というのが昔からの願ひでした)そんな訳でごく近しい人たちの笑顔に供していたのがたまたまお目にとまつたと

いう具合のようです。それはともかくとして、今年の干支にちなんで同封の如きを書きなぐつてみましたので、ご笑照くだされば幸いです。寒さの折からご自愛下さい。 〃

受贈誌(10月号)

(H. 25. 1. 20 武者昭七)

長汀をモンローウオーク初鴉 (彩108号) 平野ひろし

千本松原千の隙間に初日影 (〃)

親鸞像足下に落葉吹き溜る(薊100号) 森下流子

寺に降る雪一切の穢を隠す (〃) 〃

三毛猫をまるく撫でて日向ぼこ(現俳句12月号) 貝森光洋

年々に鴨は新し芭蕉の忌(雷魚93号) 増田陽一

鮫鰓が剥れつつ見る街あかり(〃) 〃

鴟見たか見たと答えし潮見坂(あか一月号) 山尾かづひろ

故田中哲也さんの遺句集『水馬』を読んで

飯田孝三

田中哲也さんの遺句集『水馬』を拝読しました。哲也さんとは、高志さんのお誘いで蓮見舟吟行で、何度かお目にかかりました。陽一さんが「菜」の中であげられている、亡くなられる前年の句、

仲良きことは美しきかな蟬の尿

は、哲也さんの元気なお顔とともに、忘れられません。その日は、奥様も一緒で、帰りの電車を途中まで同席させていただき、再会を楽しみにお別れました。その翌年はお見えになりませんでした。直後のご訃報は、思いもよらぬことでした。

『水馬』所収の作品中、とりわけ感銘した20句に絞って掲げます。

鳥小屋に金網の影水仙花

今生の地べたに溜まり花の屑

葉桜や針山に嗅ぐ母の髪

空気入れ押せば後ろに羽抜鶏

象の糞原爆の日は明後日

みちのくや青田へ舌のやうな雨

紐解くやうに無花果剥きにけり

春眠く東子が海へ帰るとぞ

全自動人形が泣く凌霄花

母はもう電話に出ないあけびの実

水深に似たる孤独や石路の花

いつよりか身体が傾く梅の花

浮浪者にもものふの眼や藪椿

家毎に呼鈴のあり春の雲

早稲匂ふ大合唱といふべかり

小春日や昭和の俳誌嗅いで買ふ

母はもう藁の匂ひとなりて冬

春動く一萬尺の海底も

卵生の悲しみの列鳥帰る

鯉の口拳がりて春の眠きかな

エッセイ

海を渡る蛇

武者昭七

今年は巳年だという。「巳」の表記は蛇がとぐるをまいた形から来たものらしい。大和の三輪山が神体山として崇敬されるのもあの優雅な姿がそれに似ているからだと言われた。三輪山の祭神はオオモノヌシの神。よく知られているように蛇体である。よく崇りもした。そんな蛇を古代の人々はカシコキ神と呼んで畏れ崇めた。カシコシとは「畏怖・畏敬すべき能力の人や生き物に対して抱く感情」(岩波古語辞典の意味である。蛇はかつて神であった。スサノヲはオロチ退治の際オロチに酒を備えて「汝はかしこき神なり。あへて饗せざらむや」という。

蛇は時に恐るべき愛欲・愛情の化身として登場する。道成寺伝説はよく知られた話だ。裏切られたと知った女性は蛇身となつて日高川を押し渡り男に追いつき炎を吹き

かけて男を焼き殺すが同じく蛇となつて水を渡つて男を追いかけた女の話が古く古事記に見える。伊弉諾天皇

スイニン天皇の皇子ホムチワケは長い髭が胸先にまで垂れ下がるようになっても一向に言葉を発することができなかった。あるとき空行くクグイ(白鳥の古称・広辞苑の声を聞いて初めて「あわわ」と声を発した(白鳥が霊力・呪力を具えた鳥であることが知れる)けれどもそれつきり。ある夜天皇に夢のお告げがあつて「これは出雲の大神(大國主神)のたたりであるからその社を拝ませよ」という。(これを大和に対する出雲勢力の反抗とする見方もあるとか。岩波思想体系注)

お告げのままに出雲の大社を拝むホムチワケはすらすらと言葉を發した。喜んだ皇子はその夜ヒナガヒメという女性と婚を通じた。ところが気が付くと姫はなんとヘミ(蛇の古称。大蛇をオロチという。ヲは峰、ロはノの意味の助詞、チは激しい勢いのあるものであった。あわてて逃げ出す皇子を追つてヒメは「海原を照らし船より追ひ来(「ヨリ」は「ゴ」ということになる。「海原を照らし」とは蛇の神の性格を物語るもので(チーガはインドで蛇体の河の神・水神)ヒメナガヒメは「出雲の肥の河の蛇を表す」という(同)。

ふたつの話に共通なのは愛欲に身を焼く女性が蛇体となつて水を渡ることである。なぜ蛇体なのか。なぜ水な

のか。神が蛇体となつて海を渡る叙述が僕の知る限りでは二つある。「時にあやしき光海に照らしてたちまち浮び来る者あり」(日本書紀卷一・一書第六)「この時海を照らしより来る神あり」(古事記上)。

ともにオオクニヌシが国造りのパートナーであったスクナヒコナにトコヨに去られ嘆きの最中、代わりの助つ人オオモノヌシの神が海を渡つて登場する場面である。オオモノヌシは、自分を大和の三輪山に祀るなら国造りに協力しようとする。三輪山に祀られる三輪神社の祭神がそれ。その神体は蛇とされ、社前には今も好物の鶏卵の供物が絶えないという。

「ここでは蛇はまだ愛欲の汗にまみれていない。地上の權威や権力を超えた靈威であり靈力であり聖なる存在である。そんな蛇が人間の情欲やら情念やらの形象に落ちてしまふのはいつころからのだろう。」

以上の話に通じることがどれも水を渡つて寄せてくるものが光に包まれていることだ。まはゆいばかりの光につつまれながら河を渡り海を渡つてくる蛇。それは古代人が蛇を聖なるものとして畏れあがめたことのたしかなしるしであろう。

古代の出雲ひとが海を渡る金色の蛇にイメージしたものはなんだろう。はるかな昔、この列島めざして褐色の

肌を陽に輝かしながら懸命に海を漕ぎ渡つた遠い祖先たちの姿だったのであるまいかなどと僕は思つてみたりする。大社本殿の神座は彼らの故郷であろう遙かな西の海に向つている。

○

谷川健一さんは金色の蛇の正体をセグロウミヘビと推定される。陰曆の十月ころにアナジとよばれる冬の季節風のはしりが西または西北の方向から出雲の海をおそふ。するとセグロウミヘビは黒潮の流れからおしだされ、岸に近づいてくる。背黒く腹は黄色のウミヘビは、夜、漁船の集魚灯の光を浴びると輝くように光るという。岸にうちあげられたウミヘビは剥製となりとづろをまいた形に整えられ神社に奉納され、「竜蛇さま」として祀られるという(「神・人間・動物」。(2013.01.15))

編集後記

年賀として山田寿美江先生より「本松葉屋」の新年引菓子(菓)が、そして、陽也さんから「鶴屋吉信」の福(内)が届きました。いずれも銘菓の誉れ高い和菓子です。皆で頂きました。有難うございました。

新年会は例年通り備前にて大駄弁リングをしました。たくさんさんの詩歌が口から発せられました。記憶にある

のを書いておきます。

白玉の齒にしみとほる秋の夜の酒は静かに飲むべかりけり(若山牧水)

かんがへて飲みはじめたる一合の二合の酒の夏のゆふぐれ(同)

冬日暮れぬ思ひ起せや岩に牡蠣(萩原朔太郎)

人間に四温の鯉のありとせば (孝三)

手を出さば靴あらむ(けし)の娘 (陽一)

日もすがら穴ばかり見て氷下魚釣る (高志)以下略。